

日本文学の汽水域にて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉山 欣也, Sugiyama, Kinya メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00050860

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



日本文学の汽水域にて

杉山 欣也

汽水域。淡水と海水が混じり合う水域。ブラジルは日本文学の汽水域だ。

かつて移民としてこの地にやってきた日本人は日本風の生活習慣を守り、日本語を使い続けた。そして日本語で詩歌や小説を作った。しかしながらこの地で生まれた彼らの子孫はブラジル人として育っていく。ブラジル人として育つとはポルトガル語を母語として育つということだ。この地では日系の各家庭で祖父母と孫の言葉が通じないことはごく普通に生じる。海に注ぎ込んだ川の水が海水に溶け込んでしまうように、世代が進むにつれて日本風の生活習慣や日本語は失われていく。しかし、川と海の間には汽水域と呼ばれる水域があり、ときに独特の生態系が保たれている。数多くの日本由来のものがここでは独自の変容を遂げ、適合して、ブラジル、ことにいま私のいるサンパウロを特色づける風景となっている。日本からの移民は途絶えた。文学もまた、いずれこの広大な大地に溶け込んでしまう運命にある。それでもこの汽水域のなかでは、独特な状況が生じているようにみえる。私はいま、そのありように心を寄せている。

*

サンパウロ大学客員教授の肩書きを得て、二〇一六年六月よりサンパウロに滞在している。サ

パティカル期間を利用したもので、翌年三月までの約一〇ヶ月間を予定している。

はじめて私がブラジルに來たのは二〇一三年十二月で、リオデジャネイロとサンパウロを訪ねた。三島由紀夫が世界旅行の一環として一九五二年に両都市を訪れ、『アポロの杯』（一九五二年、新潮社）に謎めいた感慨を記している、その意味を解き明かしたくなつたからだ。その後、二〇一四年十一月、二〇一五年八月にブラジルを訪れた。

その成果は「三島由紀夫におけるリオ、サンパウロ 見て書かなかつたこととしての旅行記」（『文学 海を渡る 〈越境と変容〉の新展開』二〇一六年刊行予定、三弥井書店）をはじめ、いくつかの論文や学会発表となつた。ブラジルにおいても、二〇一五年八月に開催された「国際語としての日本語に関する国際シンポジウム」でのラウンドテーブルほか、いくつかの大学で講演を行った。また、サンパウロ大学、リオデジャネイロ州立大学、アマゾナス連邦大学の先生方と交流を持ち、リオデジャネイロ州立大学と金沢大学との全学交流協定を結ぶなど、人脈も築いてきた。こうした積み重ねを経ての今回の滞在である。

今回の研究テーマは「ブラジルを旅した日本人作家たちの足跡と作品の研究」という。三島由紀夫に限らず、現代に至る多くの作家たちがブラジルを訪れ、書いたことを、受け入れたブラジル側の視点を踏まえて考えてみたいというものだ。私自身の「受け入れたブラジル側の視点」の獲得も滞在の目的のひとつである。

では、どのような作家がブラジルを訪れ、その印象を記したか。

たとえば島崎藤村。彼は一九三六年、ブエノスアイレスで開催された第一回国際ペンクラブ会合出席のため、移民船に乗って南米にやってきた。その道行は紀行文『巡礼』（一九四〇年）に知ることができるが、このサンパウロには日本移民たちと交流した足跡が深く刻まれている。

二〇一四年、私はサンパウロ市中心部にあるサンタクルーズ病院を訪問した。この病院はもと日本病院という名で、日本移民社会が皇室の下賜金を得て設立した病院である。この庭に島崎藤村の揮毫による歌碑が現存する。この碑は片面が「笠戸丸組三十週年記念碑」、もう片面が藤村の揮毫による古歌四首（柿本人麻呂、在原業平、源実朝、西行）となっている。藤村の国際ペンクラブ会合参加に関しては日本で書かれた論文がいくつか存在するが、藤村来伯のブラジル側の受け止め方がどのようなものであるかが気になった。

今回、二〇一六年八月二十八日にブラジル藤村会主催の「島崎藤村をしのぶ会」が行われることを知った。作家である梅崎嘉明氏を会長とするブラジル藤村会では毎年、藤村の命日（八月二十一日）前後に、石碑の前でしのぶ会を開催している。これに参加し、梅崎氏やサンタクルーズ病院の藤村ゆり氏など、ブラジル藤村会の方々のお話を伺った。「移民の気持ちを慰めたく、しかもそこに自分の歌を含めなかった「ゆかしさ」に私たちは応えたいのです」という作家・広川和子氏の言葉を聞いて、藤村がサンパウロに立ち寄ったことを彼らがどのように受け止めているか、わかった気がした。ブラジル藤村会では雑誌『南十字星』を刊行している。梅崎氏からいただいた『南十字星』第五号（二〇〇二年）を読み、ブラジルの日本語文壇に藤村が今なお与えている

影響を知った。

この日本病院設立とその後の経緯は、ブラジル日本移民史のみならずブラジル近代史に関わる問題である。第二次世界大戦前夜、世界的に吹き荒れたナショナリズムの傾向は、ヴァルガス政権の登場によってブラジルにもたらされた。日本病院はサンタクルーズ病院と改称され、日本移民社会の手を離れることになる。そういつた歴史の流れの中で、この石碑の存在は今日まで大きな意味を持ち続けている。なお一九三五年、聖州新報社主催で日本病院建設を記念した短編小説懸賞が開催されている。そういつたことを思いあわせると、藤村のサンパウロ訪問、そして碑文の揮毫はブラジル日本語文学史上において大きなできごとであり、さらに日本病院の建設という移民社会の歴史に関連付けて考える必要があり、日本側からの視点だけでは捉えきれないところがある。「受け入れたブラジル側の視点」の獲得が重要であることを痛感した。

*

さて、如上の私の研究課題を「ブラジル旅行者文学」と呼ぶことができそうだ。しかし「旅行者文学」という言葉にはどこかネガティブな響きがある。こちらで以下の文章を目にした。

文学と土着性とは、斬っても切れない間柄・・という以上に、ほとんど同義語といつてもよく、たぶん土着性なしに文学の成立の可能は考えることもできない。

現に多くの作家たちは、土着性を、リアリティと同じニュアンスで使う。又たとえば、外

国に取材した作品に対する否定的批評として旅行者文学といった言葉遣いを、実にしばしば見受ける。ところで、この旅行者文学乃至小説といった言い方は、一見その作品の一分だけは立てて、事実はオール否定とかわりない。つまり「文学」とはおよそ反対概念にあるといい「旅行者」を重ねあわすことによって、皮肉な反語に仕立て上げているのだ。

(やぶさき・まさし「土着性」について、『コロナア文学』一六号、一九七二年。

引用は安良田済『ブラジル日系コロナア文芸』下巻、二〇〇八年による)

ブラジルにおける日本語文学は「コロナア文学」などと呼ばれ、韻文・散文ともにさかんに創作されている。総決算というべき『コロナア万葉集』(同刊行委員会編、一九八一年)、『コロナア小説選集』全四巻(コロナア文学会編、一九七五―一九九六)などが編まれ、右の引用元の『ブラジル日系コロナア文学』をはじめ、文学史もいくつか書かれている。かつては文学賞もいくつが存在し、いまでも武本文学賞などがある。一九〇八年の移民開始当初はコーヒー農園での契約労働で文学どころではなかっただろうから、移民史と同じ歴史を持つとまでは言えないにしても、ブラジルにおける日本語文学の歴史は移民史に少し遅れて始まり、現在までに百年前後の歴史を持つている。現在でも雑誌『ブラジル日系文学』などを拠点に創作活動はさかんだ。

右のやぶさき氏の批評は、土着性、いいかえればブラジルの人と社会と自然を描くことにコロナア文学の利点を認めることが趣旨である。たしかに『コロナア小説選集』などを讀むと、日本

とまったく異なるブラジルの自然、あるいは農耕生活や都市生活などが丹念に描かれているところにコロニア文学の特色が感じられる。

その対照的な存在として取り上げられている「旅行者文学」という言葉に、短期間の贅沢旅行でブラジルの何がわかるという現地作家の反骨心のようなものが感じられる。さらに想像をたくましくすれば、「旅の恥はかき捨て」とばかりの振る舞いをした作家がいたのかもしれない。

その例に該当するかどうか、三島由紀夫に関するエピソードを紹介する。私は二〇一三年の訪問時に、多羅間俊彦氏にお話をうかがう機会を得た。多羅間氏は東久邇稔彦元首相の子息で、戦後の移民再開に先駆けて元総領事である多羅間家と養子縁組してブラジルに永住、長らく農園主を務めた方である。三島由紀夫はリンス（サンパウロ州）にある多羅間農園に滞在し、『アポロの杯』に心浮き立つような滞在記を記しているほか、帰国後には多羅間農園を舞台に戯曲『白蟻の巢』を発表した。しかしその後、三島からは通りいっぺんの礼状が届いただけで、『白蟻の巢』の献本はなかったという。別の機会に、短編小説『不満な女たち』（一九五三年）のモデルと目される女性が、その内容に激怒したという話も小耳に挟んだ。

それはともかく、ブラジルを描いた日本の作品において、短期滞在ゆえの誤解や偏見に基づく表現は多いだろう。つまり旅行者であるがゆえの早とちりや勘違いで作品を書き、ブラジルの自然や社会の実態を捉え損ねている可能性である。一方、短期滞在ではあっても作家の直観は鋭く本質を突く場合もある。その見極めが私には必要とされる。

さらに、このような研究のためには、旅行者を受け止める移民の歴史と文学を私自身がよく知らなければならぬ。文学を読み解くためには、研究活動以外にもさまざま体験を通して会得しなければならぬこともある。たとえば「白蟻の巢」がどのようなものか、私はサンパウロ郊外の農園に行つて方々に点在する蟻塚を見るまで、想像がつかなかつた。文学作品は読者の脳内で完成する芸術である。読み巧者たらんとすれば私自身がその舞台となる世界を知る必要がある。

十ヶ月の滞在はあまりにも短いというのが、およそ半年を経過した私の実感である。

*

そういつたわけで、いま私の関心は移民社会の文学に移りつつある。その際の大きな問いは以下のようなものだ。

移民社会の文学は、いずれ日本語を母語とする作家、そして読者がいなくなる運命にある。一九八〇年代以降、日本からの移民はほとんど途絶えており、ふたたび多くの移民がブラジルにやってくる状況が訪れるとは考えづらい。いま、日系社会はそのことを踏まえて活動の方向性を模索している。さらにいえば、日本国の経済的地位も低下している。経済的地位が低下すれば、他国における日本語社会は縮小し、日本語や日本文化を学びたいという人も減少する。そのような状況下において、ブラジルの日本文学はいずれ化石となつてしまうのだろうか。

長期的に見ればそういうことになるのかもしれない。しかし、そのような状況の中でもブラジルにおける日本文学は新たな方向性を打ち出しているように見える。これもさまざまに感じるこ

とはあるが、ここでは翻訳文学の可能性に絞って、書き留めておきたい。

まず私の目に留まったのは、サークル・アイリスが取り組んでいるブラジル文学の邦訳である。単行本としてアンソロジー集『ブラジル文学翻訳選集』(二〇一三年)と『ブラジル文学翻訳選集 第二巻 ガウシヨ物語』(二〇一四年)、中里オスカル『にほんじん』(二〇一五年)、ネルソン・ロドリゲス』とかくこの世は カリオカ人生』(二〇一六年)が出版されている。

いくつかの重要な作品の邦訳はなされているにしても、ブラジル文学の日本における知名度はけっして高くない。ブラジル社会と日本語を熟知した彼らによる翻訳は、これからの日本文学に資すること大と考える。なお、いま日本での販売先を模索しているとのことで、私としてはそういう仲介者の役割も果たしていきたいと考えている。

右に掲げた中里オスカル『にほんじん』は日本移民の歴史をポルトガル語で書いた作品だ。これが邦訳されたことの意義もさることながら、ブラジルでは少数民族である日系の歴史を描いた小説がポルトガル語を母語とする日系ブラジル人によって書かれたことの意義もまた大きい。その延長として、移民作家である松井太郎『うつろ舟』(一九八八〜八九年、『コロニア詩文学』、日本では二〇一〇年、松籟社)が『A barca vazia』(Lidia Ivasa 訳、二〇一五年、Escrituras)としてポルトガル語訳されている。これらの出版から、日本人移民とその子孫の文学をブラジル社会に紹介しようという動きを感じ取ることができるだろう。

また、近年刊行された日本移民作家たちの著作集にはポルトガル語訳を併載している場合があ

る。それは日本語の読めない子孫たちに自作を伝えたいという直接的な動機がある。それでも、そのポルトガル語を通して著作がブラジル人の目に触れる機会もあるだろう。継承の志は普及への道をも開くのか。日本語を解さないブラジル在住者にも内容を知りうる形態を備えた書物が徐々に増えていることに、かすかな期待をいだく。

最後に韻文について述べておこう。韻文、ことに俳句と短歌は初期移民の時代からさかんに創作されてきた、コロニア文学のメインストリームである。近年では、日本人移民が日本語で創作した俳句・短歌をポルトガル語訳する試み(『合同文芸展示会作品集』二〇一四年、ブラジル日系文学会、など)や、ブラジル人がポルトガル語で創作した短歌・ハイカイ(俳諧、haikai)を翻訳者が邦訳し併載した作品集(Raimundo Gadelha『Um Estreito Chamado Horizonte』Masuo Yamaki 訳、一九九一年、Aliança Cultural Brasil-Japão/Massao Ohno Editores など)がいくつか出版されている。各国語によるハイカイは世界的な現象であるとも聞くが、それを日本語の俳句や短歌に翻訳してゆく、いわば還流現象がこの地で生じているのだ。

付言すれば、ブラジルにおけるこうした翻訳状況の背景には、個々の翻訳者の努力もさることながら、大学や日本語学校、その他多くの教育機関で日本語が教えられていることがある。さらに世界最大の日系社会の存在がそれを支えている。その結果として、多くの日本文学研究者や翻訳者がブラジルには育っており、古典を含む日本文学作品の研究や翻訳はいま活況にある。だが、そうといった研究の動向や翻訳活動の実態は日本ではあまり知られていないように思う。

*

前述したように、今の状況が続けば移民文学としての日本語文学はいずれブラジルから消え去る運命にある。しかし、未来は誰にもわからないことだ。新たな担い手を得て日本語による創作活動がさかんになる可能性は確率的にはわずかに残されている。それが極言だと言われるならば、ブラジルの日本食がまさにそうであるように、アレنجジを加えられ、独自の進化を遂げてブラジル社会の中で生き延びてゆく余地はかならずあるはずだ。今まさに翻訳を通して日本文学が地域と言語を越境しつつあることは、この文章の後半に記した通りだ。こういう様相をリアルタイムで目撃できたことは、みずからこの汽水域に身を浸した収穫であると、いま私は感じている。これは「ブラジルを旅した日本人作家たちの研究」につづく、私の次なる研究課題となることだろう。ここにはさまざまな文学の、そして文学研究の可能性がある。

移民文学における女性の描かれ方や、古典文学・古典芸能の受容など、ほかにも関心をもって調べていることはいくつもあるが、ここに書ききれない。この汽水域はとても広く、そして深い。これからも私はこの豊かな汽水域に漂いつづけることになるのだろう。